
学内活動報告

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 3
P.67-72 (2015)

FD 研修会への学生参加の試み

Trial of Students' Participation in the FD Workshop

酒井 太一* 遠藤 りら* 黒川 佳子* 佐々木 史乃*
 SAKAI Taichi ENDO Rira KURAKAWA Yoshiko SASAKI Shino
 小川 典子* 土屋 清子* 美ノ谷 新子* 小川 薫* 岡田 隆夫*
 OGAWA Noriko TUCHIYA Kiyoko MINOTANI Shinko OGAWA Kaoru OKADA Takao

要 旨

順天堂大学保健看護学部では、平成 26 年度の FD 研修会への参加対象を従来の全教職員会から、学生が参加する会への試みを行った。研修会テーマは「アクティブ・ラーニングの実践」とし、プログラムはパネルディスカッションと小グループによるグループワークであった。参加者は、本学部教職員 41 名、他学部・関連病院の教職員 7 名、そして学部学生 14 名の合計 62 名だった。研修終了後アンケートからは、FD 研修会への学生参加について、教職員と学生からの肯定的なコメントが多く、双方に実質的なメリットがあると考えられた。今後は、FD 研修会への学生参加を基本的な研修スタイルとして継続すると共に、研修テーマによる学生参加の適否の判断や学生の募集方法・参加人数について検討していく必要がある。

索引用語：FD 研修会、学生参加、アクティブ・ラーニング

Key words：FD workshop, ,students' participation, active learning

1. はじめに

平成 20 年の大学設置基準の改正・施行により、大学は授業の内容及び方法の改善を図るために組織的な研修及び研究を実施することが義務づけられた。順天堂大学保健看護学部（以下、本学部）においても、平成 22 年の開学部以降、本学部の教育目的を達成できる教育者の育成と教育力向上を目指し、年 1 回の FD 研修会を開催している。その結果、これまでの研修会では、教職員間において教育内容や学生に関する情報交換・共有の貴重な場となると同時に、教職員相互の交流の機会にもなっていることが認められ

た¹⁾。

本学部の研修会で取り組むテーマは、学部内における教育の課題や現状、大学教育を巡る動向を踏まえて決定している。平成 25～26 年度の最近 2 年間は、「アクティブ・ラーニング」を研修会の継続的なテーマとして取り組んだ。アクティブ・ラーニングとは、教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称²⁾とされる。平成 24 年 3 月の中央教育審議会大学分科会大学教育部会の答申では、今後求められる質の高い学士課程教育とは、教員と学生とが意思疎通を図りつつ、学生同士が切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長するようなアクティブ・ラーニングによって、その知性を鍛える双方向

* 順天堂大学保健看護学部

* *Juntendo University Faculty of Health Sciences and Nursing*

(Nov. 14, 2014 原稿受付) (Jan. 16, 2015 原稿受領)

の講義、演習、実験、実習や実技などの授業を中心とした教育であるとしている²⁾。さらに、文部科学省は平成 24 年 6 月の「大学改革実行プラン」において、これからの大学教育は課題解決型のアクティブ・ラーニングを中心とした教育へと転換することが必要³⁾としており、大学教育においてアクティブ・ラーニングは喫緊の課題の一つである。しかしながら、従来の教育からアクティブ・ラーニングを中心とした教育への転換は必ずしも容易ではなく、その失敗の原因は教員と学生の双方にあることも報告されている⁴⁾。前述の答申でも示されている通り、アクティブ・ラーニングの実践には、「教員と学生とが意思疎通を図りつつ」行われる必要があり、教員のみによる取組みだけでは限界があると考えられる。

順天堂大学の他学部（医学部、医療看護学部）では、既に FD 研修会への学生参加を行い、それを教育に活用している実績がある。そこで、本学部でも平成 26 年度の研修テーマを「アクティブ・ラーニング」とするにあたり、研修会への参加対象を従来の教職員のみから、学生にも広げる試みを行った。本稿では、その試みを振り返ると共に、そのメリットや限界、課題について考察したので報告する。

II. FD 研修会について

1) 平成 26 年度 FD 研修会の概要

平成 26 年度 FD 研修会のテーマは、「アクティブ・ラーニングの実践～講義・演習・実習において、自ら学ぶ学生を育てる工夫とは～」とし、目的を「教職員の FD 活動の一環として、本学部におけるアクティブ・ラーニングの実践例を知り、今後の教育活動に活用すること、教職員間の意見交換を通じて、学びを深めると共に、相互に研鑽・交流すること」とした。アクティブ・ラーニングに関するテーマは平成 25 年度にその背景や理念などを取り上げたため、平成 26 年度には特に発展的・実践的な内容を目指した。なお、

教職員間の相互研鑽・交流は、初期の研修から重要な目的として位置付けている。

研修会の開催日と時間は平成 26 年 8 月 5 日（火）の 1 日（10:00～16:00）、開催場所は本学部のある三島キャンパスの教室や演習室を用いた。参加対象者は、本学部の教職員は原則的に全員参加とし、その他にも順天堂大学の他学部教員や臨地実習施設となる順天堂大学医学部附属静岡病院職員、さらに次年度に本学部への入職予定教員があればその者にも参加の門戸を広げた。これに平成 26 年度からの試みとして、学部学生を参加対象者に追加した。平成 26 年度の参加者内訳及び総数は、本学部教職員 41 名、他学部教員 4 名、順天堂大学医学部附属静岡病院職員 3 名、そして学部学生 14 名の合計 62 名だった。

研修会への参加学生の募集は、以下の 3 つの方法とした。1 つ目は、学生への一斉メールによって全学生に周知し、FD 委員会委員の教員に各自で申し込むこととした。2 つ目は、学部の今後のカリキュラムの編成を検討するために選出されている「学生カリキュラム委員」に案内をした。3 つ目は、将来、大学などの教育機関において教員になりたいと希望する学生に対して、教員を通じて個別的に案内をした。

2) 研修会プログラム

研修会プログラムを表 1 に示した。午前は、本学部教職員 5 名によるパネルディスカッションを実施した。昼食から午後にかけては、事前に設定した小グループに分かれてグループワークを行った。グループワークでは、午前のパネルディスカッションの内容を踏まえてアクティブ・ラーニングを実践していく際に課題に感じていることをあげ、その解決策について意見交換した。1 グループあたりの構成は教職員 6～7 人で、それに学生 2 人が加わった。その後、グループにおける意見交換の結果をスライドにまとめ、各グループ 10 分程度のプレゼンテーションを行い全体で

表1 平成26年度 FD研修会プログラム

時間	内容
10:00	開会のあいさつ
～10:10	学外参加者の自己紹介
10:10	パネルディスカッション
～11:00	「本学部におけるアクティブ・ラーニングの実践例」 長沼 淳 先生(一般教養・哲学)「学生主体の授業実践例—医学部PBLを中心に」 石塚 淳子 先生(基礎看護学)「演習科目における一学期を通じた工夫」 近藤 ふさえ 先生(成人看護学)「成人看護学におけるアクティブ・ラーニングの実際」 小川 薫 先生(カリキュラム委員長)「『主体的な学び』を促進するカリキュラムをどうデザインすべきか」 市川 茂雄 氏(事務)「学習環境の整備・運営における工夫」 ※各パネリストより10分間のプレゼンテーション
11:00	討議・質疑応答
～11:30	
11:30	昼食
～14:00	※グループ毎で食事後、グループワークに移行 グループワーク 発表スライドの作成
14:00	移動と休憩
～14:10	
14:10	グループワーク発表
～15:20	※各グループより10分間のプレゼンテーション
15:20	質疑応答・ディスカッション
～15:40	
15:40	講評
～15:50	
15:50	閉会のあいさつ
～16:00	アンケート記入
16:00～	コーヒーブレイク 自由解散

共有した。なお、プログラムの最後には参加者同士が自由に交流できる場として、食堂においてコーヒー・紅茶や洋菓子などを提供して歓談の場を設けた。

なお、学生には、教職員と同様に1日の全てのプログラムに参加するように求めた。午後のグループワークでも、グループメンバーの一人として発言してもらった。

III. 学生の参加状況について

1) 参加学生の基本属性

参加学生の基本属性を表2に示した。性別では、男性が5名、女性が9名で女性の方が多かった。学年別では、4年生が最も多く7名、次いで3年生が4名、1年生が2名、2年生は1名のみであった。

2) 参加学生の研修会での様子

筆者がFD研修会担当者として研修会全体の運営を

表2 参加学生の基本属性(学年及び性別)

	男性	女性	合計
1年生	2	0	2
2年生	1	0	1
3年生	0	4	4
4年生	2	5	7
合計	5	9	14

確認していた際に見られた参加学生の様子は以下の通りである。研修会の午前のパネルディスカッションでは、学生は5人のパネリストによるプレゼンテーションに興味深く聞いていた。ただし、プレゼンテーション後の質疑応答においては、学生自ら発言するまでには至らなかった。昼食から午後にかけてのグループワークでは、学生は各グループに2名ずつ振り分けられたためか、当初は緊張していた。しかし、グループワークが進行するに伴い緊張も解け、学生の立場から率直な意見を述べていた。教職員から発言を求められる場面も数多く見られ、その際には特に臆することなく発言していた。その後のグループワー

ク発表では、学生がグループの代表の発表者として登壇してプレゼンテーションを行うグループもあった。その際には、フロアの教職員からプレゼンテーションに対する質疑もあり、学生はそれに対してグループでの話し合いの内容や私見を交えながら回答していた。また、午前中とは異なり、フロアの一員として挙手して質問をする学生もいた。

研修会全体を通じて、終始和やかな雰囲気で行われたつつも、教職員と学生間に心地よい緊張感もあった。

3) 研修後の教職員及び参加学生からの反応

研修会終了後におこなわれたアンケートでは、FD 研修会への学生参加の試みについて、教職員及び参加学生からの肯定的なコメントを数多く得た。

教職員からの代表的なコメントの要旨としては、「学生の参加が新鮮だった。」などの学生参加そのものを評価するものや、「学生の意見は今後の授業改善に参考になる。」「学生の意見は具体的で参考になる。」「学生の意見によって課題が明確になった。」などの教職員にとってのメリットをあげるものが見られた。さらに、「今後も学生参加を継続してもらいたい。」「学生の意見がある方が、よりよい大学を目指せる。」など発展的なコメントもあった。中には、「学生の参加を前提として研修会テーマを決定した方が良い。」との要望もあった。なお、学生参加について否定的なものや改善を求めるコメントは全く無かった。

参加学生からの代表的なコメントの要旨としては、「教員の授業や学生に対する考え方が分かった。」「教員がこのような授業を組み立てていることが分かった。」という大学や教職員、あるいは自分が受けている教育に関する理解が促進されたというものが見られた。さらに、「(今回の研修会で伝えた)学生の意見が今後の授業に反映されることを祈っている。」というメッセージもあった。一方で、研究会の企画・運営の改善点についてのコメントもあった。具体的

には、「グループワークの際の学生数を多くした方がもっと意見が豊かになる。」「グループワークの際には、全学年の学生がそろっていた方が良い。」などである。学生は各グループに2名を配置したが、この配置人数が少ないことへの指摘がほとんどだった。また、研修会に関するコメントではないものの「レポートなどの課題が複数の科目で一時期に集中して出される傾向があるために、一つ一つの課題に丁寧に取り組みにくい。」など科目担当者では気づきにくい点についての指摘もあった。

4) 研修会後の組織的な対応

研修会のグループワークやその発表会において学生から「レポートなどの課題が複数の科目で一時期に集中して出される傾向があるために、一つ一つの課題に丁寧に取り組みにくい。」という指摘があった。そのため、後日、学部長、学生部長、教務委員長、カリキュラム委員長によりこのことが協議された。その結果、課題を一時期に集中させないことによって学生が自己学習できる環境づくりをすること目的に、科目責任者に対して課題の提示状況に関する実態調査が実施された。

IV. 考 察

1) FD 研修会への学生参加がもたらすメリット

平成26年度の本学部FD研修会において、学生参加を初めて試みた。その結果、研修会プログラムの進行において特に支障もなく、参加した教職員及び学生からは概ね肯定的な評価を得た。

研修会終了後のアンケートにおける教職員からのコメントでは、教職員のみで行っていた従来の研修会の方法よりも学生参加があった方が授業改善に具体的で明確な示唆が得られるとの評価があった。現在、教員によっては担当する講義の終了後にリアクションペーパーを用いて学生の講義に対する質問や

要望を回収している。また、本学部では講義・実習のそれぞれについて学生による授業評価を行い、その結果は教員にフィードバックされている。これら従来の方法に加えて、FD研修会に学生が参加し、直接、授業について意見や要望をやりとりすることは、さらに授業改善の機会を増強するという点で意義がある。中村ら⁵⁾は、優れた授業実践のための原則の1つとして、「教員と学生のコンタクトを促す」ことを挙げている。FD研修会への学生参加は日常的な授業(講義・演習・実習)以外の場面における教職員と学生の濃厚なコンタクトの機会になりうる。これらの機会の増加は、優れた授業実践につながることを期待される。

一方、参加学生からのコメントでは、現在自分が受けている教育やそれに関わる教職員に対する理解が促進されたことが伺えた。逆に言えば、現在、学生はこれらへの理解が比較的希薄なまま日々の学習を継続しているとも考えられる。橋本⁶⁾は、学生をFD活動に積極的に巻き込んでいくべき理由として、①FD活動はそもそも受益者たる学生のためであること、②学生の「自ら学ぶ」という意識改革がFDには不可欠であること、③FD活動に関与することで学生自身の精神的・知的成長を促したり積極的な行動力を涵養したりするという教育効果があることの3つを挙げている。したがって、FD研修会へ学生が参加することは、自らが受ける教育そのものに関与し、主体的な学習姿勢を得ることにもつながると考えられる。

さらに、研修会での学生の発言は、本学部全体で対応すべき課題把握のヒントになった。レポートの課題が一時期に集中しているため自主学習が行いにくいという学生の発言によって、研修会後すぐに協議の場が設けられ、その実態を把握するための調査が実施された。その結果や今後の対策についての詳細は別稿に委ねるが、FD研修会を単なるイベントと

して終わらせず、その後、組織として具体的な対応につなげたことは大変意義のあることだと考える。

以上のことから、FD研修会の学生参加は、教職員及び学生の双方が肯定的なコメントで述べている通り、実質的なメリットがあると考えられる。

2) FD研修会への学生参加の限界と課題

FD研修会への学生参加は、前述の通りメリットが多かった。しかしながら、平成26年度に初めて行った試みとしていくつかの限界と課題も挙げることができる。

まず1つ目は、研修テーマと学生参加の適否についてである。平成26年度の研修テーマは「アクティブ・ラーニング」であり、学生参加によるメリットを特に引き出すことができた。しかし、今後、研修会テーマとして様々なものを取り上げるにあたって、必ずしも学生の参加が適切なものばかりとはいえないかもしれない。例えば、指導上の困難事例を研修会の中で取り扱う場合などは、匿名化した事例からも個人を推測される恐れがあり、これに学生が参加することは望ましくない。研修後の教職員からのコメントからは、「学生の参加を前提として研修会テーマを決定した方が良い。」との要望もあったものの、教職員が必要とするテーマ選択に制限がかかりかねないという点において熟考を要する。したがって、今後は、学生参加を基本的な研修スタイルとして採用していきながら、研修テーマや内容に応じて学生参加の適否を検討することが望ましいと考えられる。

2つ目は、参加学生の募集方法についてである。当初、参加学生の募集にあたっては3つの方法を用いることで学生の偏りがないように意図していた。その結果、参加した学生は、性別では男性が5名、女性が9名だった。本学部学生の男女比が約1:11(平成26年4月現在)であることを踏まえると、男性の総数が少ないにも関わらず多くの男性の参加があっ

たことが伺えた。また、学年では4年生が最も多く、2年生は1名のみしか参加しなかった。参加を学生の任意に委ねたことにより、その属性に偏りが生じてしまった。確かに、事前に教職員側で意図的に選出した学生のみを参加させるのではなく、学生の自由意思に委ねたことに大きな誤りがあったとはいえない。しかしながら、参加学生の属性の偏りは、研修の中で得られる学生からの意見が偏る可能性も否定できず、今後は何らかの改善をしていくべきことであろう。服部⁷⁾は、FD活動に参加する学生メンバーの選出をルール化している大学の取り組みについて、元々アクティブな学生に偏らないという点で、学生一般の意見を吸収するには向いていると評価している。実際、順天堂大学医学部のFD研修会では、研修会のテーマに応じて適した学生を教職員側から指名して参加学生を決めている。本学部でも、例えば、各学年で選出されている学生カリキュラム委員2名は必ず参加するなどを検討する必要があるかもしれない。

最後に3つ目は、参加学生の人数設定である。学生の要望として参加学生数の増員があった。確かに、講義形式の研修はともかく、グループワーク形式の研修の際には学生数が多い方がよりリラックスして臨めるのかもしれない。また、4学年がグループの中に揃っていれば、先輩や後輩の意見を聴く機会にも恵まれる。ただし、グループワークの小グループ編成において、学生の比率を高め且つ全学年を揃えらるとなると、より多くの学生募集が必要になったり、研修会の規模そのものが大きくなったりする。この点については、実現可能性を踏まえて今後検討していかねばならない。

V. 結 論

平成26年度のFD研修会は、教職員に加えて14名の学生が参加した。研修後アンケートからは教職

員と学生の双方から研修会への学生参加について肯定的なコメントが得られ、実質的なメリットがあると考えられる。今後は、FD研修会への学生参加を基本的な研修スタイルとして継続することが望ましい。しかし、研修テーマによる学生参加の適否の判断や学生の募集方法・参加人数の設定については検討していく必要がある。

VI. 引用文献

- 1) 佐々木史乃、齊藤麻子、酒井太一 他：新設学部におけるFD研修会の意義 ～保健看護学部での2年間の実践報告～、順天堂保健看護研究 2(1)、39-45、2013
- 2) 中央教育審議会大学分科会大学教育部会：予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（審議まとめ）、2012
- 3) 文部科学省：大学改革実行プラン ～社会の変革のエンジンとなる大学づくり～、2012
- 4) 中部地区大学グループ・東海Aチーム 編：アクティブラーニング失敗事例ハンドブック ～産業界ニーズ事業・成果報告～、文部科学省「産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」中部圏の地域・産業界との連携を通じた教育改革力の強化 平成26年度東海Aチーム（教育力）チーム成果物、2014
- 5) 中井俊樹、中島英博：優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法、名古屋高等教育研究 5、283 - 299、2005
- 6) 橋本勝：FDと学生力 -岡山大学 学生・教育FD検討会の1年-、京都大学高等教育 8、179 - 187、2002
- 7) 服部憲児：学生参加型FDの現状と実践上の課題、大阪大学大学院人間科学研究科紀要 38、197 - 213、2012